

## 哲学的・倫理的問題提起の概念としての理性と感性

カント、バウアー、ルカーチ

オーガナイザー： 柏崎正憲(一橋大学)

提題者： 大澤俊朗(群馬大学)

柏崎正憲(一橋大学)

秋元由裕(北星学園大学)

理性と感性という、対立的で、非両立的であるようにさえ見えるような人間の二能力は、本質的にはいかなる関係にあるのか——この一見して古典的な哲学の一問題は、ポスト啓蒙のドイツ(語)哲学において格別な重要性を帯びるようになった。古典古代においてもキリスト教中世においてもおおむね支配的であった理性主義や主知主義は、感覚や経験に基礎づけられた新学説によって揺らぐ。そのような時代においてカントの批判哲学は、人間理性にふさわしい領分(叡智界)を可感的・現象的世界に対して再確保する一方で、実践理性への移行において感性に導き手の役割を与えるものでもあった。カントの解決策が後続世代に促したのは追随よりも、実り多い批判である。そして、革命、産業化、世俗化、国民化、形式的合理化といった世界史的な諸変革の渦中においては、カントの時代にもまして、哲学的概念としての理性と感性は実践的・倫理的な問いを投げかける性質のものとなっていく——理性はわれわれをどこに導くのか、感性はわれわれに何を示しうのか、両者がそれぞれに発する命令は実践的に統一ないし両立させることができるのか。

以上をふまえて、このワークショップでは、後期啓蒙および近代のドイツ哲学において、理性と感性が(理論的のみならず)実践的・倫理的な問題提起の概念としていかに機能したかに光を当てる。もし報告者たちが的を射ているならば、(おそらく今も有力な)次の想定——近代哲学において(合)理性はよりいっそう強固で支配的な地位を占め、批判理論やポストモダニズムの台頭まで挑戦されないままだった——は、見直されるべきだろう。

【第1報告】「バウムガルテンおよびカントにおける理性的自己愛」(大澤俊朗)では、これまでほとんど研究されてこなかったI. カントにおける「理性的自己愛」の概念が、彼に影響を与えたA. G. バウムガルテンの倫理学における完成主義との比較をつうじて解き明かされる。バウムガルテンがカントに与えた影響力の大きさは、従来、美学や形而上学の分野では究明されてきた一方で、倫理学の分野では(その重要性が認識されているにもかかわらず)十分に検討されてこなかった。バウムガルテンの本格的な検討を含んだカント倫理学のモノグラフは、Toshiro Osawa, *Baumgarten's Legacy in Kant's Ethics* (Routledge, 2024) が刊行されるまでは、Clemens Schwaiger によるドイツ語での研究しかなかった。このような事情を反映して、バウムガルテンはこれまで哲学史上の重要人物として捉えられることも稀で、独創的でないという批判にさらされ、せいぜいカントに影響を与えた他の数多くの哲学者のうちのひとりにすぎないという評価が大半であった。本論はこのような評価の再考を促すための一つの試みである。

理性的自己愛の概念は、カントが自己愛を概ね否定的に捉えていたという見解で研究者が一致しているため、従来ほとんど脇に置かれてきた。この趨勢に抗して報告者は、理性的自己愛こそカントが感性と理性の関係をどのような仕方で緻密に構想したかを暴き出す鍵概念だと主張する。導き出す結論は以下である。第一に、ひとは、道徳法則にしたがう際に快を引き起こす格律に基づいて行動する自分自身に満足するように、自分自身を理性

的に愛すべきという意味で、カントは「理性的な快としての自己愛」に対する義務を(感受的な自己愛のあらゆる形態を否定しつつも)特別に肯定した。第二に、カントが「理性的な快としての自己愛」への義務だけを肯定したのは、バウムガルテンの自己愛の義務に関する枠組みを批判的に検討し、感受的な自己愛への義務を否定する一方で、感性と理性との融合が高次の仕方で「完成化」する形態の自己愛だけを救い出そうとしたからである。

【第2報告】「ブルーノ・バウアーのカント批判と宗教的疎外論」(柏崎正憲)では、B. バウアーが急進的な無神論の立場を鮮明にする以前の著作の検討をつうじて、いわゆるヘーゲル右派から左派への転向にもかかわらず彼の根底において一貫している哲学的方法と実践的志向との解明が目指される。バウアーの方法と宗教哲学的関心との関連性を理解するための鍵となるのは、学生時代に書かれたカント美学批判である。彼は美的判断における意識と存在の一致をカントに読み込みつつも、美の知覚において感性よりも思考に優位を与えることでカントの限界を克服すべきと主張する。ここでバウアーは、カント美学の諸要素をヘーゲル流の自己意識論に組み込もうとしているが、そのさいヘーゲルの(美学ではなく)『宗教哲学講義』における宗教芸術の考察に依拠している。彼によれば宗教的疎外は、感性的対象の外化(自然の表象と宗教的感情の双方)をつうじて理性と感性の対立を恒久化するが、しかし思弁こそが両者を和解させ、普遍的自由をもたらす。この完成主義的思考枠組は、シュトラウスを批判した「右派」バウアーと、ヘーゲルを無神論者として描いた「左派」バウアーとの双方において一貫している。

【第3報告】「美学における社会批判と倫理——ルカーチを手がかりに」(秋元由裕)では、初期ルカーチの美学的テクストを中心の題材として、「物象化」批判の動機を美的なもの内に見出す立場がどのように形成されたのかが論じられる。産業革命以降、資本制生産の急速な発展を背景にして、芸術家たちは「美」についての既存の理想から離反してゆく。芸術が、必ずしもわかりやすい快をもたらすものではなくると共に、美学は、そもそも何を「美的」だと規定するのかの根源的な問いに取り組みざるを得ない。そのことにより、美的経験と倫理との結びつきも疑問視されるようになる。かつての人文主義的な伝統が「趣味」「共通感覚」を扱う場合には、美的経験が市民の道徳感情を陶冶するはずだと完成主義的に考えていたのに対し、市民的道徳の破綻に直面した20世紀の美学は、美的なものが「社会批判」の機能を引き受けることに関心を向ける。前者の伝統を継承したハイデッガー、ガーダマーに対して、後者の方向性を代表するのがG. ルカーチ、そしてフランクフルト学派である。

ルカーチは、物象化現象からの脱出を可能にする「ユートピア的現実」として美的領域の独自性を解明するために、新カント派(西南学派)の価値哲学を引き合いに出していた。彼によれば、他の「論理的価値」「倫理的価値」とは異なり美的価値のみが、その価値実現のために「価値体験」を必要とするのだという。この見解は、「反省的判断力」についてのカントの教説を変奏させたものである一方、より興味深いのは、ここでルカーチが美的体験を「倫理」から完全に切断している点である。すなわち、道徳感情の陶冶のために美的なものを位置づけるのではなく、美的なもの自律性を強調しつつも、しかしそうした自律性がなお物象化批判にとっての参照点になるという考えがここで示されている。こうしたルカーチの思想を手がかりに、本報告はモデルネ以後における倫理と美学との緊張関係を考察するものとした。